太宰府人物志

資料室だより⑤

少弐頼尚の動向

少弐頼尚は南北朝期に活躍した武士です。南北朝期の九州では、北朝方（幕府方）・南朝方（征西府方）・直冬方といった各勢力が次々と大宰府を制圧します。それだけ大宰府が重要な地であったということでしょう。大宰府を本拠とした少弐氏も、これらの勢力の動向に伴い、複雑な動きをみせます。

足利尊氏帰東後、九州に残った幕府方の勢力は一色道猷でした。道猷は後に博多に移りますが、当初は大宰府にいたことが史料より推測できます。頼尚も幕府方として活動したのですが、同じ筑前を本拠としたため、道猷との競合はまぬがれえませんでした。

足利直冬が1349年に九州入りすると九州の情勢は一変します。直冬は以前市史だよりにも紹介しましたが（平成17年12月15日号）、尊氏の実子ながら疎まれ、尊氏の弟直義の養子となった人物です。観応擾乱により尊氏と直義が争うと直冬は終始養父直義方として活動しました。直冬は準将軍的な存在として九州の武士から熱狂的に迎えられ、瞬く間に九州の地を席捲します。頼尚も直冬が九州入りした翌年には直冬方につき、直冬の大宰府入りが実現します。

しかし、直冬は1352年に一色氏方に敗北すると、長門へ移りさらに南朝方へ降ってしまいます。頼尚は大宰府を舞台に一色氏と争い、翌年針摺原において、これを破ります。その後、頼尚は征西府方へ転じます。1353～57には征西府方として活動していることが南朝年号を使用していることから分かります。しかし再度幕府方に転じたようです。1359年には征西府方と大保原において戦い、敗れています。

この戦いで息子直資は戦死します。息子頼澄は1361年に大宰府入りした征西府のもとで活動しますし、息子冬資は頼尚とともに幕府方として活動しています。父子・兄弟で二つの勢力に分かれて活動するようになるのです。

この少弐氏の動向に、①各勢力間を渡り歩く、②父子・兄弟間で別々の勢力に属す、という南北朝期の九州武士の複雑な動向を典型的に見てとることができるのです。

～市史編さん室　朱雀信城～